

## 1. はじめに

報告者は2019年12月19日から29日まで、笹川平和財団主催のイラン短期研修に参加した。本プログラムの前半では、テヘランを訪問し、後半にはゴム、エスファハーン、カーシャーンを訪れて各地で研修をおこなった。

テヘランでは、イラン国際関係学院での講義、プレゼンテーションを行ったほか、イラン外務省や在テヘラン日本大使館、国会も訪れる機会を得た。また、ゴレスターン宮殿や、聖なる防衛博物館などの観光も行った。テヘラン大学前の本屋街にも足を運ぶことができ、報告者はジュースジャーニーの『ナースィル史話』をはじめとする8冊のペルシア語史料を購入した。

後半は地方都市訪問を行った。ゴムではマルアシー図書館に訪れ、写本史料を見せていただいたほか、ファーティマ・マアスーメ廟へも参詣した。エスファハーンでは、セルジューク朝期以前から存在する金曜モスク、サファヴィー朝期の建築が美しいエマーム広場などを訪れたほか、ザーヤンデ・ルードの対岸の新ジュルファーでアルメニア教会を観光するなど、様々な史跡を訪れた。カーシャーンではフィン庭園やガージャール朝期の商人の館を観光した。

短いプログラムであり、関わるイラン人の多くが「エリート」であったため、イラン社会の一面しか見ることは出来なかったが、それでもイランの人々や社会と関わることは有意義な経験であった。

本報告書では、特に関心を持った「エリート」の中の「マイノリティ」について、簡単にではあるが、紹介する。

## 2. 「エリート」の中の「マイノリティ」

「はじめに」に於いて、関わるイラン人の多くが「エリート」であったため、イラン社会の一面しか見られなかった、と述べた。しかし、会う人自体は同じ性別、人種ではなく、多様な人々であったことは興味深かった。

ここで「エリート」とは、ある社会において指導的、支配的役割を受け持つ人々を指す。本報告書では、「エリート」の代わりに「今回会ったイラン人」とすることもできたが、敢えて「エリート」という言葉を使った。なぜなら、今回会ったイラン人の多くは、イラン社会で支配的役割をもつ集団に属することを指摘する必要があると感じたからである。例えば、イラン国際関係学院の学生は、高い確率でイラン外務省に入省する人々であるし、ゴムで案内をしてくださった人々は、実務的ではないかもしれないが、宗教的なエリートであろう。

また、「マイノリティ」については、少数者という意味で使っている。女性は、イラン社会全体では少数者ではないが、今回紹介するイラン国際関係学院には、少数者であるため、そう紹介している。

以下では、イラン国際関係学院における女性、イラン国際関係学院におけるアゼリー人、また宗教エリートの中のハザーラ人をそれぞれ紹介する。

### ① イラン国際関係学院における女性

現在のイランでは、憲法や法律において女性の「母」という役割が強調されており、その姿勢は女子差別撤廃条約の定める「女子に対する差別」に当てはまる。また、これらの法律と革命以前から続く家父長制システムの影響は、女性の就業率が男性と比べて非常に低いというデータなどにも現れている。実際の社会に於いては、革命以後のヴェール強制、男女分離などによって、むしろ以前よりも高い社会的地位を獲得した女性の存在も指摘できるが、女性が構造的に差別されていることは否定しようもない事実である。

そのような状況ではあるが、イラン国際関係学院においては女子学生も存在し、プレゼンテーション・セッションにも数人参加していた。上述の通り、イラン国際関係学院の学生の多くは外務省へ入省するため、おそらく彼女たちにも外交官への道が開かれていると考えられる。

プレゼンテーションの場に現れたイラン人学生の男女比は 5:1 ほどで、男性の数が圧倒的に多かった。また、イラン国際関係学院の学生は東アジアの政治問題、経済問題、社会問題という 3 つのテーマでプレゼンテーションを行い、その班分けは男女が完全に分離されたものだった。これは、日本人学生側が性別ではなく、関心によって班分けされたことと対照的であった。このプレゼンテーションは政治、経済、社会の順で行われたが、政治、経済で大幅に時間が押したため、社会に関する質問時間は設けられず、女子学生に質問する機会は失われた。そもそも、彼女たちは政治、経済における発表に対しても積極的に質問や発話をするとはなかった。

勿論この例は、一大学の数人の女子学生の事例の紹介であり、ここからイランのジェンダー問題を語ることは不可能であることは指摘しておく。

## ② イラン国際関係学院におけるアゼリー人

アゼリー人とは、アゼルバイジャンと、イラン北西部に居住し、アゼリー語を母語とする民族である。宗教的には 12 イマーム派が多いが、スンナ派も一定数存在する。イランの人口の四分の一近くを占めるといわれる。

今回テヘランでの研修の多くに同行した男子学生の一人が、オルミーエ出身のアゼリー人であった。オルミーエとは、イラン北西部、トルコ国境近くの多様な人種の存在する地域に位置する都市である。彼はペルシア語を第二言語として学び、英語も使いこなして外務省への入省を目指している。我々日本人学生にお菓子を自腹で買ったり、実家にウマが数十頭いたり、と裕福であるらしい。また外交官となることを誇りに思っている自信家な側面も見られた。さらに、アゼリーであることにも誇りを持っており、一日目、テヘランの空港を出てすぐに自分がアゼリーであることを教えてきた。

## ③ ゴムの宗教的エリートの中のハザーラ人

ハザーラ人とは、アフガニスタン中央部のハザーラジャートに居住する民族であり、サファヴィー朝下で多くがスンナ派からシーア派に改宗した。19 世紀末以降、経済的困窮などからカーブルやマシュハドなどに人口流出した。モンゴロイドの外見的特徴を保有している。

今回ゴムで我々を案内してくださった一人の法学者の秘書が、ハザーラ人であった。彼が普段はどのような仕事をしているのか不明なため、彼を「宗教的エリート」とするのは適切ではないかもしれない。また、ゴムでの滞在時間は短く、彼の人となりを深く知ることは出来なかった。

め、彼と会話した内容を紹介するにとどめたい。

彼はマシュハド出身で、祖先はアフガニスタンからの移民かもしれない、と言っていた。また、彼は、ハザーラ人であるため、マシュハド以外では東アジア人とよく間違われるという話をしている、実際に報告者の目の前でツアーコンダクターの女性に日本人と間違われていた。彼は控えめな性格のようで、自ら喋ることは少なかったが、報告者がアフガニスタン史に関心があることを知ると、自分がハザーラであることを明かしてくれた。その際、踏み込んで彼の生活や差別の状況などを聞けばよかったのだが、報告者が訪れた際のマシュハドの写真などを見せて話していると時間が無くなってしまった。

以上の三つの事例は紹介でしかなく、何か分析を行うほどの情報量はない。しかし、研修前には関心の大きくなかったマイノリティという視点を得られたことは、報告者にとって非常に有意義であった。また、短い滞在でありながら、多様な少数者と接触する機会があるとは、プログラム参加前は想像もしておらず、貴重な経験であった。

最後に、このような機会を下さった笹川平和財団の皆様、およびイラン国際関係学院の皆様に感謝を申し上げたい。